

一乗谷朝倉氏遺跡の保存と活用を 目的とした連携研究

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、四つの特別名勝を含む庭園や寺院跡、復原された武家屋敷等はもちろん、季節ごとに変化する美しい景色も楽しめる、非常に多くの見どころと魅力を備えた遺跡です。さらに、今年10月1日には新たに福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館が開館する予定で、博物館内の一画で石敷遺構の露出展示が実施されます。遺跡の中には、既に半世紀以上にわたり屋外で露出展示されているものもあり、残念ながら庭園の一部の景石等では劣化の進行が認められます。そこで、奈良文化財研究所と福井県は一乗谷朝倉氏遺跡を保存・活用するための包括的な保存技術の確立を目的として連携研究の協定を結び、現在は、新しい博物館内において遺構を安定して展示する手法と、景石の劣化を抑制する手法の確立を目的とした研究を実施しています。

景石の劣化に関しては、劣化の様相やこれまでの気象観測結果から、凍結破砕によるものと考えました。すなわち、景石にはその生成過程で生じた細かなクラックが多数内包されていて、ここから浸透した水が冬季に凍結することで景石の破壊が生じるものです。そこで、この推論を確かめるため、もっとも冷え込む1月末に今年は調査をおこないました。幸い、当日は期待通りに冷え込んだため、明け方に景石を観察すると、クラックの内部で氷を確認することができました。また、クラック内部で測定した温度変化からも水が凍る様子が確認できました。ここでの調査検討の成果が一乗谷朝倉氏遺跡はもちろん、全国の遺跡の保存と活用に資するものとなれば幸いです。（埋蔵文化財センター 脇谷 草一郎、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 藤井 佐由里）



早朝に実施した景石劣化状態調査

まきばしら 当麻寺巻柱の総合調査

奈良文化財研究所では、2020年度から翌年度にかけて当麻寺が所蔵する巻柱の調査を実施しました。

当麻寺の巻柱とは、中世に当麻寺曼荼羅堂（本堂）の柱の外側に巻き付けてあった木材です。表面には当麻寺へ田畠を寄進することを取り決めた中世の文書等が残っており、当麻寺の歴史を考える上での重要な資料として扱われてきたものです。寺には2枚が現存しており、保管されてきました。

まず、巻柱の建築学的調査では、巻柱等に残存する取り付き痕跡等から、巻柱の銘文は当麻曼荼羅にもっとも近い柱に、参詣者に正対して記されていたことがあきらかになりました。

また、今回の銘文調査にあたってはひかり拓本技術も用いました。従来の碑文用のものを応用して、反射を利用した抽出や赤外線撮影との合成等、墨書用に改良したもので効果を検証しました。その結果、微細な凸形状が抽出できる等、摩滅した銘文に対しても一定度の効果を得ることができました。これによって文字の判読が進み、複数の銘文は目立つ場所から順番に記されていたことがわかりました。

くわえて、江戸時代に巻柱がどのような状況にあったのかということについても史料より検討しました。その結果、同時代の拓本集に現在は失われた3枚目の巻柱の拓本が採られていたことが確認でき、この時代には3枚の巻柱が念仏柱に取り付く形で保管されていたことが判明しました。

以上のように、文化財に残る微細な痕跡を読み解くことで当麻寺の歴史の一端をあきらかにすることができました。詳細な報告については『奈文研論叢』第3号に掲載しておりますので、そちらもご参照いただければ幸いです。（文化遺産部 橘 悠太）



当麻寺巻柱調査の様子